

カラフトマス 日本系

Pink Salmon, *Oncorhynchus gorbuscha*



管理・関係機関

北太平洋遡河性魚類委員会 (NPAFC)
日口漁業合同委員会

漁業の特徴

主に北海道北東部沿岸の産卵河川周辺で夏～秋季に定置網で漁獲される。広く北太平洋を回遊するが、北太平洋公海のさけます漁業は禁止されている。他国 200 海里水域内での漁獲量は不明である。

生物学的特性

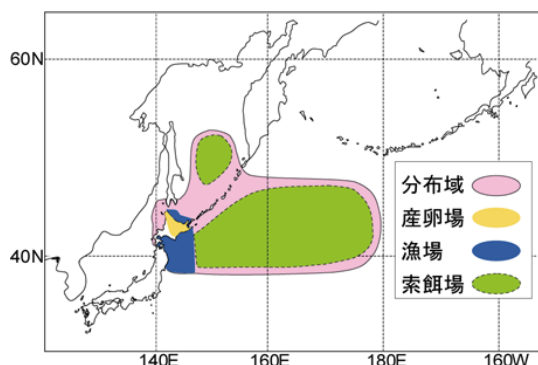
- 体長・体重：尾叉長 50 cm・1.5 kg
- 寿命・成熟年齢：ほぼ全てが 2 歳
- 産卵期・産卵場：8～10 月、北海道北東部に流入する河川
- 索餌期・索餌場：夏期・北西太平洋
- 食性：水生昆虫（河川）、動物プランクトン・マイクロネクトン（海洋）
- 捕食者：鳥類・オショロコマなど魚類（幼魚）、ネズミザメなど大型魚類・おとせいななど海産哺乳類（未成年・成魚）

漁獲の動向

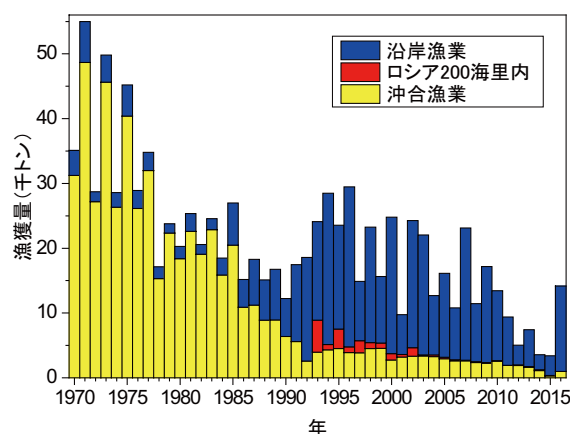
1970 年代から沖合域での漁獲量は減少し、沿岸域の漁獲量が増加した。沿岸漁獲尾数は、1990 年代に急増し偶数年と奇数年の差も広がった。しかし近年、奇数年と偶数年で一定の豊凶が見られるものの、そのパターンの持続性は不明瞭になり、日本系カラフトマスは不安定な資源動向にある。2016 年漁期（7 月以降）の沿岸漁獲量は 12,351 トン（814 万尾）と増加したが、2017 年漁期の沿岸漁獲量（速報値）は 1,713 トン（105 万尾）で、過去 35 年間で最も低い漁獲量となった。最近 5 年間（2012～2016 年）の沖合を含む漁獲量は 3,000～14,000 トンであった。

利用・用途

用途は広く、塩蔵品、生鮮、缶詰等がある。魚卵製品として、筋子（ます子）がある。



日本系カラフトマスの主たる分布域（高木ほか 1982 を改変）



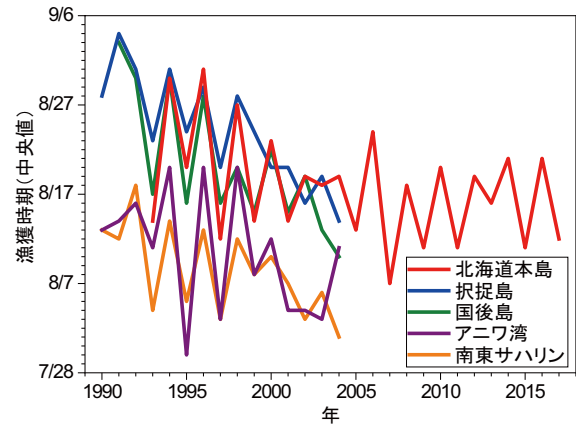
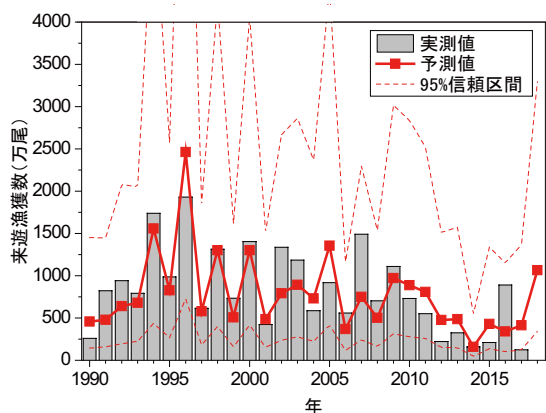
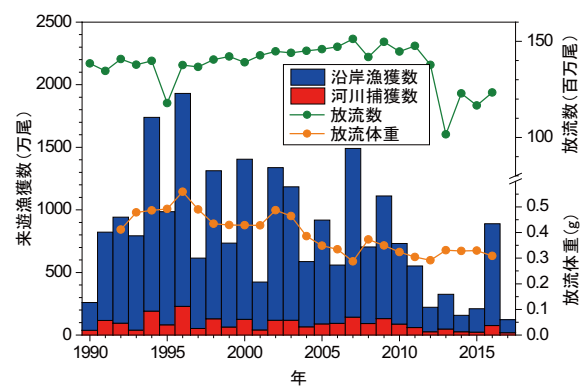
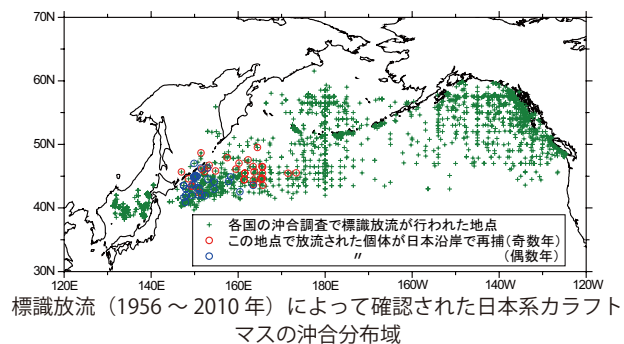
日本の漁業におけるカラフトマスの漁獲量経年変化

資源状態

稚魚放流数は 1980 年代から約 1.1 ～ 1.4 億尾で安定しているが、来遊漁獲数（沿岸漁獲＋河川捕獲）は、1970 年代後半～ 1980 年代前半の約 100 万尾から、1990 年代には 500 万尾以上となった。しかし、2009 年以降は、2016 年を除けば、年々減少する傾向にある。2017 年は過去 35 年間で最も低い漁獲量に陥ったことから、資源水準は低位であり、減少傾向にあると判断された。

管理方策

繁殖期の降水量と冬期・春期の平均気温を説明変数として作成した再生産曲線を元に来遊漁獲数を予測し、現在の資源水準が維持できる河川遡上数を獲り残すという、産卵親魚量一定方策とした。今後は、放流効果と自然再生産効果の定量的な評価を行い、索餌域である北太平洋の生物生産も考慮した資源管理方策を開発する必要がある。



カラフトマス（日本系）の資源の現況（要約表）

資源水準	低 位
資源動向	減 少
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	504.1 ～ 708.4 万トン 最近 (2016) 年：513.6 万トン 平均：584.1 万トン (2012 ～ 2016 年) (注：日本系以外も含む)
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	約 3,000 ～ 14,000 トン 最近 (2016) 年：14,160 トン 平均：6,700 トン (2012 ～ 2016 年) (注：日本系以外も含む)
日本系カラフトマスの 我が国の沿岸漁獲量 (最近 5 年間) ※	約 1,700 ～ 12,000 トン 最近 (2017) 年：1,700 トン 平均：4,800 トン (2013 ～ 2017 年)
管理目標	現在の資源水準の維持 目標値：平均沿岸漁獲数 (過去 10 年) 4.5 百万尾
資源評価の方法	沿岸漁獲量および河川捕獲数により 水準と動向を評価 再生産モデルによる解析
資源の状態	2017 年の沿岸漁獲数 / 目標値 = 0.24
管理措置	産卵親魚量一定方策 持続的河川捕獲数 1.0 百万尾 稚魚放流 1.2 億尾 幼魚・未成魚期・成魚期 EEZ 外、成 魚期河川内禁漁
最新の資源評価年	2017 年
次回の資源評価年	2018 年

※これ以外の漁期・漁法でも日本系は、他の系群とともに漁獲されるが、その混合量の推定は困難である。